

3年課程看護学生の「看護研究」への取組みと教育評価

—本学の2000年から2004年の5年間の分析—

古城 幸子*¹⁾・木下 香織¹⁾・栗本 一美¹⁾・岡 宏美¹⁾

1) 看護学科

(2005年11月9日受理)

3年課程短期大学看護学科の必修科目である「看護研究」について、1997年に学生の取り組みの動向について調査している。その結果、研究テーマが多岐にわたり、研究対象も広範囲に行われており、また、研究動機は臨地実習の直接体験として事例研究が多く実施されている事が明らかになっている。

1997年のカリキュラム改正から、「看護研究」の授業展開について修正を加えてきた。今回、現在の「看護研究」の取組みを評価し、指導上の課題を明らかにするために、2000年から5年間の学生の研究論文を分析した。その結果、前回調査と比較して、実習体験から研究動機を得た論文が減少し、また、事例研究より調査研究の方法を選択している学生が増加していた。研究発表の方法も前回調査時と比較して、視覚的な発表方法に変化していることがわかった。これらの結果を基に、「看護研究」指導の課題として、問題の明確化に焦点を当てた指導の必要性や、ITの活用に対する教員の能力開発、倫理委員会の設置、発表方法についてなど検討を要する課題が明確になった。

はじめに

本学看護学科の必修科目としている「看護研究」の授業目的は、研究活動の基礎を学び、研究的態度を養うことを通して、看護観を深めることである。学生の研究への取組みはテーマ選定からデータの収集、分析および論文作成までを、マンツーマンで担当教員の指導を受けながら実施する。主体は学生であり、その関心や問題意識を大切にしながら指導助言を行っているのが本学の特徴である。そのため、研究のテーマや内容は、学生の関心の所在が比較的良好に現れている。1992年度から1996年度の5年間の「看護研究」の動向について調査した結果¹⁾(以後、前回調査とする)では、研究テーマが多岐にわたり、研究対象も広範囲に行われており、また、研究動機は臨床実習の直接体験による事例研究の方法が多くとられていた。

今回、現在の「看護研究」の取組みを評価し、指導上の課題を明らかにするために、2000年から5年間の学生の研究論文を分析した。前回調査と比較して、実習体験から研究動機を得た論文が減少し、また、事例研究より調査研究の方法を選択している学生が増加していた。研究発表の方法も前回調査時と比較して、視覚的な発表方法に変化していることがわかった。これらの結果を基に、「看護研究」指導の課題がいくつか明らかになった。

1 研究目的

本学3年課程看護学科学生の2000年から2004年の5年間に発表した「看護研究」論文を対象に、「看護研究」に対する学生の取り組みの動向を分析し、教育指導の評価と共に、今後の課題を明確にする。

*連絡先：古城幸子 看護学科 新見公立短期大学 718-8585 岡山県新見市西方1263-2

II 研究方法

1. 研究対象

2000年度から2004年度の「看護研究」第19巻から第23巻に収録されている研究論文316編。内訳は、2000年度57編、2001年度67編、2002年度61編、2003年度59編、2004年度72編である。

2. 調査内容

集録されている研究論文の内容から研究動機、研究対象、研究方法等の抽出、また各年度の発表方法、授業評価を資料とした。

3. 分析方法

研究者4名により、研究動機等の整合性を見た。また、「看護研究発表会」の発表方法や2004年度の授業評価も分析の対象とした。それらの結果を前回調査と比較し、看護研究に対する学生の関心や研究手法、発表方法などの変化を見た。

5. 倫理的配慮

集録集「看護研究」はすでに学内外に公表されたものであるが、匿名性を保持し、統計的に処理を行った。

III 本学における「看護研究」の位置づけ

1. 看護研究の目的・目標

「看護研究」は、2単位30時間としている。学生は、2年次後期から3年次の約1年半かけて取り組み、学生全員が自分の関心のあるテーマを選定し、1人1編の論文をまとめている。

看護研究の講義目的として、表1左欄に示すように2000年度から2002年度は「看護学を科学的に研究し、専門職としての研究活動の基礎を学び研究的態度を養う」を目的に、①看護研究の必要性を理解する②論理的な思考力、判断力を身につける③研究の方法論を理解する④学術論文のまとめ方を学ぶ⑤研究発表方法を学習し、研究発表の運営を体験する、という5つの目標を掲げていた。

表1 「看護研究」シラバス¹⁷⁾

年度	単位数・看護研究講義目的	講義計画（シラバス）
2000	単位数：2単位 30時間	
2001	<目的>	<シラバス>
2002	看護学を科学的に研究し、専門職としての研究活動の基礎を学び研究的態度を養う。 <目標> ①看護研究の必要性を理解する。 ②論理的な思考力、判断力を身につける。 ③研究の方法論を理解する。 ④学術論文のまとめ方を学ぶ。 ⑤研究発表方法を学習し、研究発表の運営を体験する。	1. 看護研究の基礎的講義 1) 看護研究の意義 2) 研究方法論 3) 研究論文のまとめ方 4) 研究発表の仕方 2. 研究活動の実践（3年次） 1) 研究テーマの決定（6月） 2) 研究の実施（7～12月） 3) 研究論文のまとめ（12月）
2003	単位数：2単位 30時間	3. 研究発表及び研究集録の編集と発刊
2004	<目的・目標> 1. 研究活動の基礎を学び、研究的態度を養う。 ① 看護研究の必要性を理解する。 ② 論理的な思考力、判断力を身につける。 ③ 研究の方法論を理解する。 ④ 学術論文のまとめ方を学ぶ ⑤ 研究発表方法を学習する。 2. 研究活動を通して、自己の看護観を深める。	<研究の時間的経過> 1. 授業は2年次に終わり、研究活動はゼミ方式で3年次の4月～12月に研究論文としてまとめる。 2. テーマの最終決定は、3年次の5月とする。 3. 研究論文の締め切りは3年次の指定日とする。 4. 研究発表及び研究集録の編集と発刊は3月上旬とする。

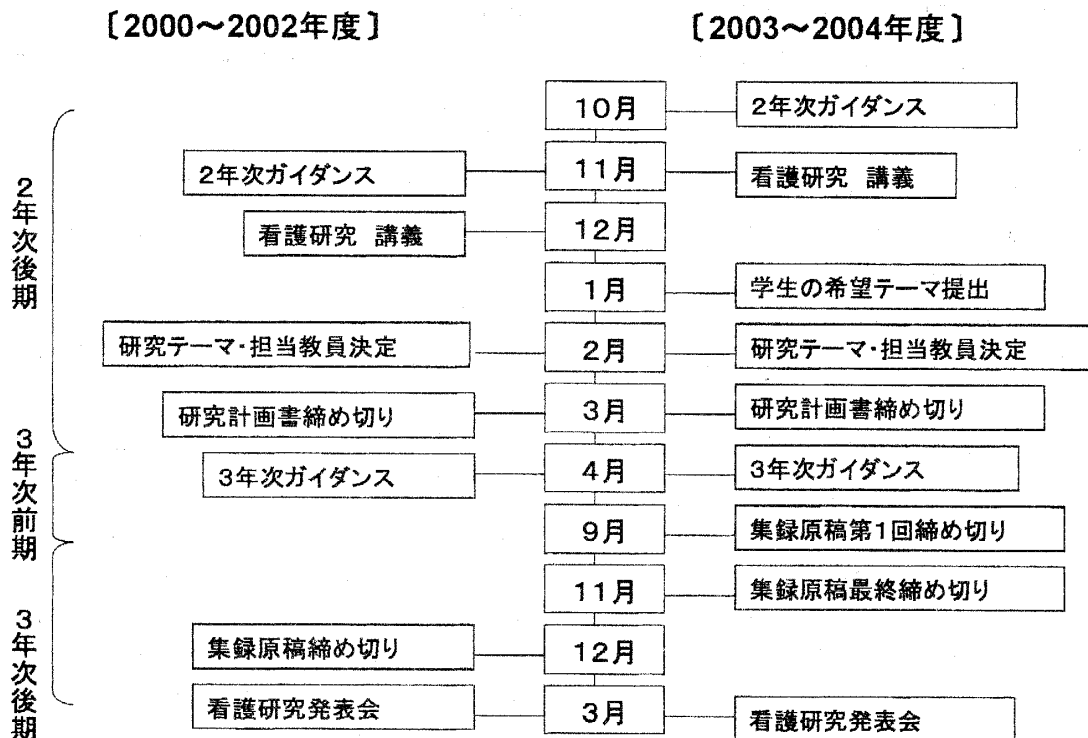


図1 看護研究シラバス概要

2003年度からは、目的・目標の一部を見直し、目的を「1. 研究活動の基礎を学び、研究的態度を養う」と「2. 研究活動を通して、自己の看護観を深める」という2点とした。目標は、目的の1に対して、①看護研究の必要性を理解する②論理的な思考力、判断力を身につける③研究の方法論を理解する④学术论文のまとめ方を学ぶ⑤研究発表方法を学習する、の5点とした。

2. 「看護研究」シラバスの概要

「看護研究」は、講義・演習の授業形態を取っており、表1右欄に示すように2年次では研究の基礎知識に関する講義を8コマ、3年次では演習として研究活動を7コマの計15コマ30時間を設定している。学生は、設定時間以外にも実習の合間を縫い、春期・夏期休業などを活用して指導担当教員と連絡を取り、主体的に研究活動に取り組んでいる。

3. 研究時期

図1のように、2003年度から「看護研究」の進度を全体的に前倒しにし、早い段階から取り組み、終了できるように時期を修正した。それは、就職

活動が早まったこと、看護師国家試験の時期や出題傾向が変更になったこと、実習後の到達度試験を取り入れたことなど、学生は臨地実習でのストレスに加えて、重複した課題を前にして不安が大きくなってきたことが修正の大きな理由である。

「看護研究」の単位認定者は学科長を筆頭とし看護学科教員全員が関わるが、その企画運営に関しては、教員の「看護研究委員」3名が担当する。また、学生の「看護研究委員」と連絡しながら、調整や指導を行っている。

1) 2年次 後期

「看護研究」のガイダンスは、10月に「看護研究」の授業目的や研究の進め方などの説明を1コマ行う。「看護研究」の基礎知識としての講義は10月から12月にかけて、看護学における研究の意義と研究方法に関する事例研究、文献研究、実験研究、調査研究、データ処理、論文の書き方について7コマを開講している。

その後、学生は興味・関心のあるテーマに関連した複数の教員に相談しながら、研究テーマを第一希望、第二希望に絞る。1月のテーマ提出を受けて、2月に指導担当教員を決定する。教員1人あたり学生5～6人を担当する。学生は担当教員の指

導を受けながら、研究計画書を作成し3月に提出する。準備が整った学生は、春期休業頃からデータ収集を開始する。

2) 3年次

3年次の1年間の「看護研究」の進め方、研究の依頼の仕方などのガイダンスを4月に1コマ実施する。その後、集録原稿締め切りの9月までは、担当教員の指導の基で研究活動を実施する。2002年以前は12月に完成原稿を提出していたが、2003年より9月に提出することが大きな変更点である。「看護研究発表会」は1・2年生も出席し、3月に2日間をかけて行う。発表会前には完成原稿が集録集「看護研究」として発刊できるよう、教員と学生の委員を中心に編集作業を行う。現在の集録集掲載の論文の形式は、テーマなどを含み、図表もレイアウトして、22文字×40行の2段組で5枚(約8800文字)以内と制限している。

IV 結果

1. 研究の動機 (図2・3)

研究の動機が明確に記されている論文の中で、三側面の動機を抽出した。まず、実習体験から動機を得たものを「看護的関心」とし、その年度にクローズアップされた社会の動きや問題を動機としたものを「社会的関心」、自分自身や家族の闘病体験などの個人的な体験が動機となっているものを「個人的関心」とした。講義や演習など実習体験以外の関心が動機となったものについては「その他」として分類した。

図2のように、5年間の平均で「看護的関心」は

19.9%、「社会的関心」は20.9%「個人的関心」は16.8%であった。前回の調査では「看護的関心」が67.3%と多かったのに比較(図3)して、今回は約20%と激減していた。

「看護的関心」の研究内容は、受け持ち患者の看護過程の展開の振り返りや、患者とのコミュニケーションにおける自己洞察が中心で、成人看護学、精神看護学に集中していた。「社会的関心」の内容は、母性看護学では性感染症、妊婦の喫煙、遺伝子診断、父性、老年看護学では認知症、身体拘束・抑制、災害弱者、介護保険制度、小児看護学では学童の視力低下、児童虐待、育児ストレス、成人看護学ではSARS(重症急性呼吸器症候群)、臓器移植、精神看護学ではアルコール依存症、地域看護学では医療法の改正による訪問看護、在宅療養者家族の介護負担などがテーマとされていた。「個人的関心」では、祖父母を調査対象にしたもの、海外研修を題材にしたもの、アレルギーなど自己の闘病体験に基づいたもの、家族のがん告知や死に直面した体験、障害児とのかかわりを基にした研究などがあった。

前回調査には1件のみであった海外に目を向けたテーマが、その後はAIDSに関連した感染症対策に関するテーマで、1998年度、1999年度に各1件ずつ見られた。今回の5年間では、2000年度に1件、2001年度に1件、2003年度に3件、2004年度に3件と計8件の調査研究がなされていた。調査対象の国はアメリカ、オーストラリアなど本学が計画している海外のスタディツアーでの体験や、ネパール、カンボジアなど海外ボランティア体験

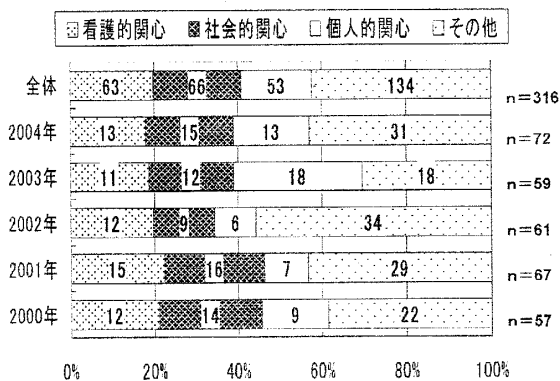


図2 研究動機

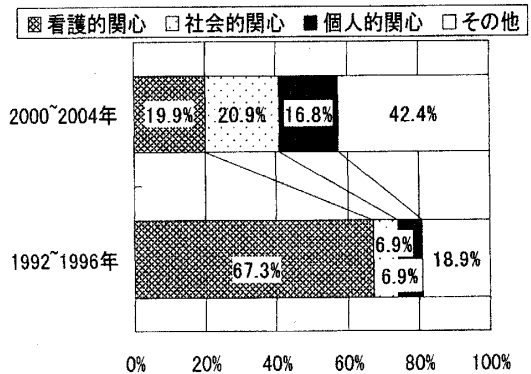


図3 事例研究の対象者

がきっかけとなったテーマなどが特徴的であった。

2. 研究方法 (図4-6)

1) 研究方法

研究方法では、図4のように5年間全体で見ると、調査研究が61.1%、事例研究が24.4%、文献研究が9.5%、実験研究が5.1%であった。2003年度の調査研究が約70%と多く、また事例研究が少ないという傾向があるが、年次的な変化の特徴は見られていない。

前回調査と比較 (図5) すると調査研究が前回35.5%、今回61.1%と大幅に増えており、一方、事例研究は47.5%が24.4%と減っていた。

2) 調査研究の方法

最も多く取り組んでいる研究方法は調査研究であるが、その内訳は図6のとおりである。2000年度には調査研究の62.5%が質問紙のみの調査方法によるものであった。しかし、年度がすすむごとにその割合は減っていき、2004年度には37.2%となり、インタビューがほぼ同率の34.9%と増加していた。質問紙によるアンケートとインタビュー、参加観察とインタビューといった複数の調査方法を取っている研究は2000年度には3.1%であったが、2004年度には16.3%となっていた。前回調査との比較では、調査研究の中で質問紙によるアンケート調査の割合は54.9%から51.1%とやや少なくなっているものの、大きな変化はなかった。

3. 研究対象者 (図7)

研究の対象者については5年間の全体で見ると、患者・家族という看護の対象者を研究対象とした論文は45.0%で、これには実習で受け持った患者家族以外にも、施設入所の高齢者や在宅の家族介護者なども含まれる。一般を対象にしたものは15.3%で、中高生対象の意識調査や、会社員対象の健康意識などである。看護学生等を対象にしたものは14.4%で、この中には本学の学生を対象に実験研究の被験者や意識調査などを含んでいる。看護師など医療の専門職を対象にしたものは4.2%、看護学生と看護師、および看護師と患者家族といった対象を重複して選択しているものが

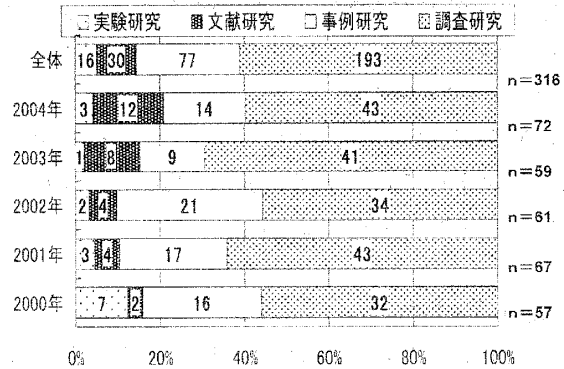


図4 研究方法

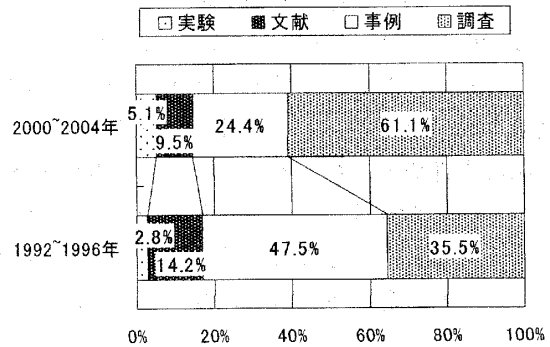


図5 研究方法の比較

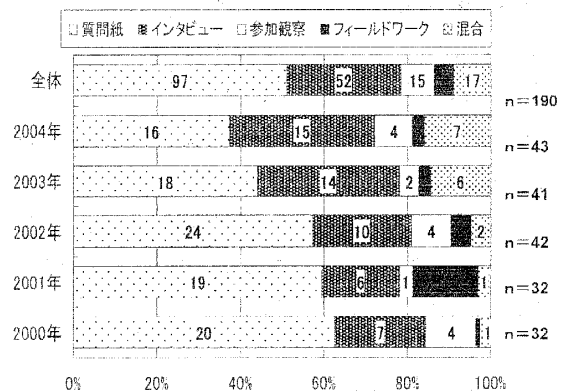


図6 調査研究の内訳

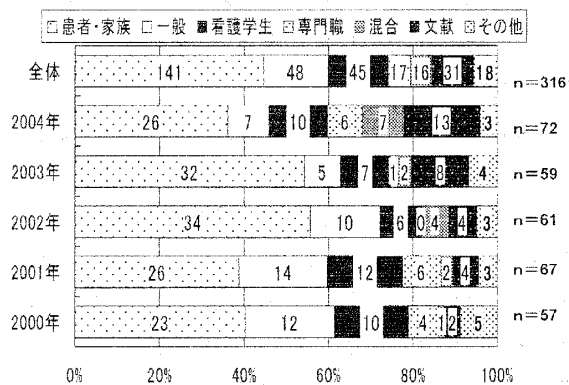


図7 研究対象者

5.4%、文献研究が9.5%、その他では地域や施設そのものをフィールドに使ったもの、微生物を使ったものが5.8%であった。

前回調査では、一般の中に施設入所者や妊産婦などが含まれているなど、分析の基準が一致しないため直接比較することは避けた。

4. 先行研究の検索 (表2)

先行研究の検索で、最近5年間の大きな変化はインターネットの活用である。本学図書館の蔵書の検索も学内LANが使用可能となり、また医学中央雑誌、PubMed (National Library of Medicine)、CiNii (論文情報ナビゲーター・国立情報学研究所) などの文献検索をITで行うように指導を進めてきた。インターネットのサイトから引用する学生も、表2のように2000年で8.8%、2004年では18.1%となり、少しずつ増えてきた。引用元は厚生労働省のホームページなどが多かった。

	学生数	IT利用者	割合
2000年	57	5	0.088
2001年	67	12	0.179
2002年	61	10	0.163
2003年	59	9	0.152
2004年	72	13	0.181

表2 インターネット文献利用者

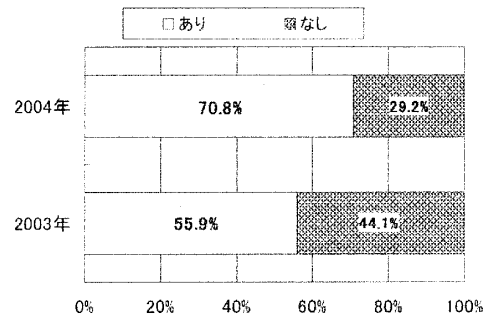


図8 倫理的配慮についての明示

5. 倫理的配慮について (図8)

倫理的な配慮についての記載は、2002年度までの論文にはほとんどが明記されておらず、2003年度から研究方法の中で述べていたり、倫理的配慮としての項目立てをして明記したりといった記載が見られるようになった。図8のように、2003年では55.9%に記載があったが、2004年では70.8%に倫理的な配慮が明記されていた。

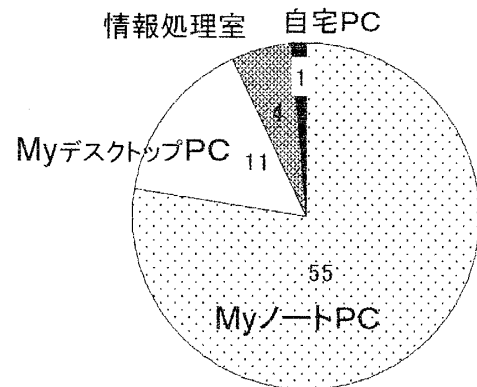


図9 パソコンの保有率

6. 研究発表 (図9.10)

発表の方法は「看護研究」という集録に掲載すること、および「看護研究発表会」での口演である。2つの発表方法はいずれも必須としている。

1) 論文発表

1995年までの集録では手書きとワープロ使用がほぼ同率であったが、翌1996年は手書きが数名となった。1996年に校舎改築に伴って情報処理室にWindows 95のパソコンが配置され、1997年からはワープロでの原稿提出を原則とした。2004年度卒業学生のパソコン保有率は図9に示すように、学生が個人のノートパソコンを持っている率は77.5%、デスクトップ型は15.5%、自宅のパソコン

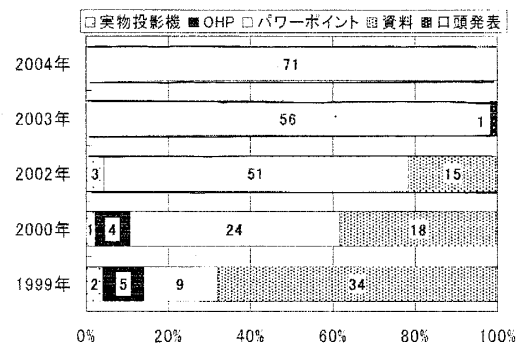


図10 プレゼンテーション

表3 2004年度「看護研究」の授業評価

<評価点>「非常にあてはまる」5点、「まあまああてはまる」4点、「どちらともいえない」3点、「あまりあてはまらない」2点、「全くあてはまらない」1点

I 講義を含む看護研究に対する取り組み方について		
①	私はこの授業にきちんと出席した	4.73
②	私はこの授業のシラバスを事前に読んだ	2.89
③	私は予習をしてこの授業に臨むようにした	2.73
④	私はこの授業のあとに復習をするようにした	2.76
⑤	私は授業で出された課題をきちんと提出した	4.37
⑥	私は私語などをせず集中して授業を受けた	4.15
⑦	私はわからないことについて教員に質問した	3.95
II 看護研究におけるあなたの達成度について		
1. 研究活動の基礎を学び、研究的態度が身についた		
1)	看護研究の必要性が理解できた	4.36
2)	倫理的な思考力、判断力を身についた	4.25
3)	研究の方法論が理解できた	4.11
4)	学術論文のまとめ方を学べた	4.05
5)	研究のプレゼンテーションが学習できた	4.40
2. 研究活動を通して、自己の看護観が深まった		4.55
III 看護研究全体に対する自己の取り組みは総合的にみて高く評価できる		4.09

ンを使用するという1名を加えると、94.4%の学生が自分のパソコンを保有していた。その他の学生は情報処理室のパソコンを活用している。

2) 口演発表

発表会での口演発表は、学生主体で企画運営しており、司会も座長もすべて学生が運営する。関連テーマで群を設定、発表時間は一人7分で、群でまとめて質疑応答という形を取っている。プレゼンテーションの方法は、1998年まではOHPか手元資料を配布するという形がほとんどであったが、1999年に液晶プロジェクターを購入したことで、徐々にプレゼンテーションソフトのPower Pointの活用率が上がった。2001年のデータが欠損しているが、図10のように1999年に18.0%、2000年では51.1%の学生がPower Pointを使用し、2004年では全員がPower Pointによるプレゼンテーションを行っている。

7. 授業評価 (表3)

2004年度の授業評価は、研究発表会終了の3月4日に調査した。調査用紙は2002年度から全学的に使用している授業評価用紙を一部修正して使用した。調査項目は大きく3つの内容で、I 講義を含む看護研究に対する取り組み方の7項目、II 看護研究におけるあなたの達成度の6項目、III 総合評価1項目の計14項目である。各質問項目に5つの選択肢を用意し、「非常にあてはまる」5点、「まあまああてはまる」4点、「どちらともいえない」3点、「あまりあてはまらない」2点、「全くあてはまらない」1点とした。

表3に示すように、取組みについては、①出席、⑤課題提出、⑥集中の3項目については4点を超えていた。一方③予習、④復習や②シラバスの確認などについては、3点を切っていた。達成度については、どの項目も4点を超えて高い評価となっ

ている。研究的態度の平均は4.24、看護観の深まりは4.55で、また、総合評価も4.09と高い結果となった。

IV 考察

1. 研究プロセス

「看護研究」の目的は、研究活動の基礎を学び研究的態度を養うことにある。新たな知見や独自性を要求することではなく²⁾、研究の一連のプロセスをきちんと踏んでいくことの意義を認識させ、これからの研究意欲へとつながる³⁾、という考え方と本学のねらいは一致している。「看護研究」は学生たちが将来、現場の中でも主体的に課題に取り組む姿勢を持ち続け、専門職の質の向上に寄与できる人材に育っていくための土台作りである。また、そのプロセスを通して、最終的には自己の看護観を深めるという短期大学3年間の看護教育の締めくくりとなる。

研究のプロセスの第1段階であるテーマ選定は、学生の希望を最大限尊重して担当教員を決定するため、研究動機は学生の自発的なものである。動機が1997年度の前回調査と比較して、大きく「看護的関心」が減少していることは、学生の関心の内容が変わったのではなく、テーマ提出の時期が大きく関与していると考えられる。前回調査時は、テーマ提出時期が3年次の実習が3分の1程度終了した段階であり、今回は2年次の2月で、3年次実習を全く体験しない段階でテーマを提出しなければならない。必然的に「社会的な関心」や「個人的な関心」といったところに動機を求めることになる。「看護的関心」が減少しているものの、研究内容はいずれも看護を視点においたものとなっている。単なる個人的な関心事項ではなく、何らかの形でその研究成果が「看護」に貢献していくものである⁴⁾という研究のゴールについては、教員間の認識は一致している。

しかし、研究テーマの提出から計画書を仕上げらるまでに1ヵ月余りという短期間の中で、仮説の設定や研究方法の選択、先行文献のクリティークなどの時間が十分にとれない事が大きな課題である。「自分が疑問に感じたこと、より深く知りたいと思ったことを解明していく楽しみを体験して

ほしいと考え、課題や目的を精選していくことには時間をかけている」⁵⁾という四年制大学ならではの時間の確保が短期大学では難しく、教員のジレンマとなっている。

研究方法については、「看護的関心」に動機づけられていない事が影響して、事例研究が減少し、調査研究が増える結果になった。しかし、調査研究の方法では、アンケート調査というサーベイの手法は徐々に減り、インタビューや参加観察などのフィールドワークを行う学生が今回の5年間の中でも増加してきている。またその調査方法も一面的な調査に終わらず質と量の両側面から、複数の調査方法を補完的に使った研究も増加してきた。濱中の報告⁶⁾でも、学生は資料収集の過程でも、身をもって学ぶことが少なくないので、実験研究、面接法など、できるだけ学生の手による、学生自身を活用できる研究方法をすすめている、と述べている。本学も調査用紙を配布回収という対象者の顔の見えない研究方法を安易に勧めず、学生自身の行動と体験を生かした研究方法の選択を指導している。

また、看護研究における倫理指針⁷⁾を基に研究計画書作成段階での倫理的な課題を検討し、研究対象者への説明と同意を口頭や文書で確実にを行うよう指導してきた。その結果、倫理的な配慮が明記される論文が2004年度に増加した。しかし、30%余の論文には倫理的な記載がなく、研究倫理に関するガイダンスを含め、指導担当教員個々の指導能力を高める必要がある。

研究対象者でみると、今回の5年間でも年度によってばらつきがあり、一定の傾向を見ることはできない。しかし、患者・家族という看護の対象者への研究が約40%であり、倫理的なハードルを考えると受け持ち患者以外の患者・家族への研究は、今後さらに困難になる事が予測される。

学生の授業評価では、学生自身がまじめに取り組んだことが伺えた。一方、予習復習やシラバスの確認などについては、他の科目の講義に対する評価⁸⁾と同様に自己評価が低く、特に「看護研究」に関する講義は単発で時間割に入ることが多く、また、講義資料も当日に配布されるために、予習復習がしにくいという点が低い評価の要因である

う。達成度については、研究的態度、看護観の深まりも高い評価を示した。さらに、総合評価も4.09と高く、科目履修の目的目標が達成されていると考えられる。

2. IT機器の活用

先行研究の検索もインターネットが活用され始めた。また、ほとんどの学生が自分のパソコンを保有していることもあって、文書やデータ整理、グラフ作成などが容易にできるようになった。また、「看護研究発表会」も2004年度は全員がPower Pointを使ったプレゼンテーションを行った。このプレゼンテーションソフトの使い方については、2コマ180分の演習を正規時間外に組んでおり、指導教員の得手不得手による発表指導の差がないように配慮している点も活用が大きく広がった要因である。

視覚的な発表形態は1・2年生の聴衆の態度にも影響が大きく、Power Point使用前の発表会では、発表者の内容がうまく聴衆に伝わりきらず、2日目には欠席者の空席が目立つ状況であった。しかしPower Pointをほとんどの学生が使用し始めたこの2年間は、聴衆の集中力が途切れず、2日間という長丁場でも、欠席者が少なくなった。

これらの効果を考え、2006年度入学生からは、カリキュラムの中に医療情報を取り入れ、必修単位として医療情報Ⅱという科目を設定した。その中で、ワープロ、計算、プレゼンテーションソフトの使用についての講義演習を行うことを計画している。

3. 今後の課題

1) テーマの選定までの絞込みに時間的な余裕がない

多くの四年制大学では、問題意識の明確化、研究目的の明確化に時間をかけている^{9) 10) 11) 12)}。しかし、3年課程ではそのための時間的な余裕がないのが現状である。小野寺の「3年間という教育期間の中で、看護研究について正規の講義以外のさまざまな看護教科目に看護研究の意義、具体例などを盛り込み、絶えず学生にそれとなく刺激を与えることは有益である」¹³⁾という提言は重要であ

る。

2) 研究が個人作業となり、グループ間での学び合いが少ない

時間的な余裕がない事が影響して、実習の合間を縫っての研究活動となり、教員と1対1の個人作業になりがちである。テーマを学生の主体的な選択を重視していることから、教員の担当学生が、それぞれ全く異なる研究テーマに取り組む事が多い。そのため、関連ある文献の抄読会（クリティーク）を行うことにも無理がある。ゼミ形式でのグループディスカッションをすることで、一度に複数の異なった研究スタイルを学ぶことができる¹⁴⁾という機会を作る事が十分ではない。

教員側からテーマ提示を行って学生を募集することや、2年次早期から興味のある分野や指導を受けたい教員とのゼミが行えるなどの対策を検討する必要がある。

3) 看護研究倫理委員会の設置が必要である

患者・家族を対象とした研究が年々減少していることは、研究開始時期が3年次実習開始前であるため、実習体験をテーマに選択しにくいことも大きな要因であると前述した。また、実習施設以外での患者・家族または看護師を含めた医療スタッフを対象とした研究では、院内の倫理委員会において審査される事が増えてくることも考えられ、そのため、研究開始が遅くなったり、結果的に実施できないという裁定が下されることも予測される。

本学では、学生の研究に対する倫理委員会がなく、今後学科内での委員会設置も視野に入れて検討する必要がある。

4) 発表形態に工夫が必要である

60～70名という学生が、一人一人発表するため、一人の発表時間は7分、質疑を含めても10分弱の時間しか取れないのが現状である。最近の看護系の全国学会においても、ポスターセッションが多く取り入れられており、ポスターセッションによる卒論の発表方法が取り入れられている大学もある¹⁵⁾。ポスターセッションを取り入れた発表方法について、今後検討していく必要がある。

また、学内だけではなく、質の高い研究については、過去にも幾つかの看護研究論文を全国学会

や雑誌に発表してきた。学生が自分の学問としての存在価値を世に問う初めての仕事として、学外への発表の機会は意義深い¹⁶⁾という点では、学生に自信を持たせる貴重な機会になる。しかし、科目のねらいは研究のプロセスを学ぶという目標で、オリジナリティやエビデンスを生み出す研究は、大学院レベルの研究に求めるのが妥当であろう。

謝辞

本研究に関連して、使用させていただいた「看護研究」論文の該当卒業生、および指導担当教員に深謝いたします。

引用文献

- 1) 松本幸子・金山時恵・木下香織他：新見女子短期大学における学生の看護研究の動向、新見女子短期大学紀要, 18, 93-100, 1997.
- 2) 濱中喜代：学生の主体性を尊重した研究プロセスの指導, Quality Nursing, 5 (1), 15-19, 1999.
- 3) 香春知永：学生の課題探求能力と態度の基礎を育む指導, Quality Nursing, 5 (1), 9-14, 1999.
- 4) 前掲書3) p12
- 5) 前掲書3) p11
- 6) 前掲書2) p17
- 7) 看護倫理検討委員会編：看護研究における倫理指針、日本看護協会出版会、2004.
- 8) 学生による授業評価, Vol.2, 新見公立短期大学, 2003.
- 9) 小野寺杜紀：卒業研究の目標、指導にあたって—準学士の卒業研究—, Quality Nursing, 5 (2), 1999, pp48.
- 10) 前掲書3) pp9-14
- 11) 前掲書2) pp15-19
- 12) 川口孝泰：主体的思考力を養う卒業研究の指導, Quality Nursing 5 (1), 20-24, 1999.
- 13) 前掲書9) p6
- 14) 前掲書12) p22
- 15) 前掲書12) p20
- 16) 岡田由香：学生の希望を尊重した研究テーマの設定, Quality Nursing, 5 (1), 34-39, 1999.
- 17) 平成17年度学修ハンドブック, 新見公立短期大学, 2005.

Three-year College Students' Approach to "Nursing Study" and Educational Evaluation - The analyses of our five years from 2000 to 2004 -

Sachiko KOJO, Kaori KINOSHITA, Kazumi KURIMOTO, Hiromi OKA

The Department of Nursing, Niimi College, 1263-2 Nishigata Niimi, Okayama 718-8585 Japan

Summary

According to the research conducted in 1997 on students' trends of "Nursing Study," a required subject in the nursing department of three-year college, themes and subjects covered a broad range and many case studies were done. Since curriculum revision in 1997, how to teach "Nursing Study" has been modified. This time, students' research papers during 5 years from 2000 to 2004 were analyzed to evaluate students' approach to "Nursing Study" and clarify the problems in teaching. Compared with the last results, few students gained the motivation of the paper from the experience of practical training and the students who selected the method of survey study rather than that of case study increased in number. Their presentations changed into more visual ways. These results suggest that teachers focus on clarification of the theme, improve IT skills, establish an ethics committee and consider ways of presentation.

Keywords: Nursing Study, educational evaluation, three-year college student